

[シンポジウム]

## 現代高校教育改革のゆくえ —問題の構造と改革課題—

1997年7月28日の夏季合宿研究会（於：ホテルおかだ会議室、箱根）プログラムとして、標記のテーマによるシンポジウムを開催した。以下に掲載する4つの論稿は、4名のパネラーに、それぞれの報告内容をまとめてもらったものである。

周知のとおり、臨教審以降、高校教育は政策的にも実際的にもさまざまな改革をすすめてきている。世論の注目を集めた総合選択制高校の新設をはじめ、とくに第14期中教審答申が出された1990年以後においては、学科の再編成や、単位制高校設置など、全国各地でめまぐるしいばかりの動きがみられる。そうしたなか、1997年4月に発足した第16期中教審が6月、第二次答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』を提出した。これは、1995年4月に発足して1996年7月に第一次答申を提出した第15期中教審の審議を引き継いでいたものである。同答申は大学および高校の入学者選抜の改善、中高一貫教育の導入など、高校教育の改革に密接に関連する提案を盛り込んだものとして関心をあつめ、議論をよんでいる。

戦後新学制の実施後50年が過ぎ、その間とりわけ高校教育はいちじるしい変貌を遂げてきた。高校進学率の急上昇、学校間の階層化とその格差拡大、高校受験競争の激化と進学競争の低年齢化、そして進学後の中途退学者および「不本意就学者」の増大、……。こんにちの高校教育をとりまく問題状況はけっして単純ではなく、その背景・要因や構造を読み解き改革の方向性を見定めることは容易ではない。しかしながら、進学率が96%に達し、しかも「10代の若者」の内面と行動に社会的関心が注がれる現在、高校教育の改革は間違いなく教育改革全体にとってきわめて重大な一領域をしめるものである。

本シンポジウムでは、このような問題関心に基いて、①近年の高校教育改革に関する政策的動向と背景を整理し、②そのなかで新設された「総合学科」の実例から改革のミクロな実態や課題状況をさぐり、また③全国的な改革動向に関する種々のデータに即したマクロな分析を踏まえて、④今後における高校教育改革の課題とさらに論議されるべき諸問題について考察することを試みた。報告は、①を佐藤博志、②を戸塚忠治、④を榊原禎宏の各会員がおこない、③については、継続して高校教育改革に関する実態調査を実施され、最近その成果を編著書『高校教育改革の総合的研究』（多賀出版、1997年）にまとめられた国立教育研究所・菊地栄治氏にお願いした。これら4名の報告を受けて、小松郁夫会員による司会のもとで討議が展開された。

（浜田 博文）